

峯野龍弘原作・小川政弘脚色

ノンフィクションドラマ

「愛ひとすじに—峯野龍弘物語—」

峯野龍弘(10代、20代)	東裕之
同ナレーション	小川政弘
父親	荒木寛二
母	長岡絵里子
教会員(女性)	成田真美
教会員(男性)	荒木寛人
イントロ	小川政弘
アナウンサー/タイトル/聖書の言葉	大橋めぐみ
<前編>	
映画館支配人	飯島勅
Mさん	大橋めぐみ
<後編>	
蒲田教会牧師	荒木寛二
特別講師	荒木寛人
倉持芳雄牧師	小川政弘
ラング宣教師	飯島勅
宗教幹部	小川政弘
日曜学校長	荒木寛人
イエスの声	小川政弘
サタンの声	荒木寛二
小出忍牧師	荒木寛二
小原十三司牧師	飯島勅
篠原寮母	長岡絵里子

【前編】

イントロ	人生はドラマ、あなたが主人公です。この度も、「この指ドラマ館」によろこそ。
アナウンサー	お元気ですか？ 古いことわざに、「艱難、なんじを玉にす」という言葉があります。辞書によれば、“人間は苦勞・困難を乗り越えることによって、立派な人物になる“という意味ですが、そのような人生を歩んだ一人の日本人キリスト教伝道者をご紹介します。
タイトル	峯野龍弘原作・小川政弘脚色 ノンフィクションドラマ「愛ひとすじに—峯野龍弘物語—(前編)」

音楽

アナウンサー 福音ネット伝道協力会がお贈りする、「この指とまれ」ノンフィクションドラマ。今回は日本を代表するあるキリスト教伝道者の半生の物語です。人生の「艱難」にはいろいろなことがあります、その大きなものはなんと言っても育った家庭環境でしょう。厳しく、様々な問題を抱えた家庭環境の中から、非行・犯行に走る人も出てきますし、それを乗り越えて、すばらしい人生を切り開く人も出てきます。その違いはどこから来るのでしょうか？ では、あなたに、ご自身と向き合いお考えいただくためにお贈りする真実のドラマ「愛ひとすじに一峯野龍弘物語」その前編、どうぞお聴きください。

音楽 (ブリッジからナレーションへ)

アナウンサー **第1章 出生と入籍**

聖書の言葉 女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。(旧約聖書イザヤ書 49:15)

峯野龍弘ナレーション 私は、1939年(昭和14年)8月10日に横浜の泉町で生まれました。正確に言えば、「生まれた」とされています。おかしい言い方ですが、私は自分がどこで生まれ、本当の産みの母が誰なのか、いまだに全く知らないのです。でも私は、自分が私生児だとは長いこと夢にも思わず、それを知ったのは、生まれて何十年もたってから、そう、父が死んでほどなく、母がこう語ってくれた時でした。

母 「龍弘、お前は、本当は私の子ではないんだよ。お父さんが道楽の末、ある女の人に産ませた子で、生後間もなく、私が引き取って育てたんだよ。」

音楽 (ショックキング)

龍弘(モノログ) 今、母さん、なんて言った？ …僕は母さんの子じゃない？僕は、僕は私生児なのか?!

ナレーション 本当にショックでした。私は言葉も出ずに、母の顔を見つめました。その顔は、心なしか悲しそうでしたが、でもこれまでと変わらない優しいほほえみを浮かべていました。

龍弘(モノログ) もっと聞いてみたい。僕を生んだ人は、どこの誰なのか。まだ生きているのか。母は、どんな思いで僕を育ててきたのか。僕のことをほんとはどう思っているのか…。でも聞くのはよそう。今、突っ込んで質問することは、母を悲しませるだけだ。

ナレーション 私にとっては、父がつかの間の欲望によって、よその女に産ませた子を憎いとも思わず、引き取って我が子のように育ててくれたという事実のほうが、ずっと大切だったのです。それからしばらくして、私は冒頭のイザヤ書の言葉に出会いました。

龍弘 (聖書を読む)「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。」

(モノローグ)たとい産みの親は僕のことを忘れても、神様は、決して僕を忘れない…。僕は産みの母を知らない。もう僕を忘れてしまったのかもしれない。でも神様は、まるでほんとの親のような、育ての母を与えてくれた。これまで、どうしようもないおやじのせいで、いろいろつらいこともあったけど、この母に守られて、これまで生きてこられた。それが、神様が僕のことを決して忘れないことの何よりの証拠じゃないか。(涙声に)ああ、神様、感謝します！ 僕のことを見捨てないでいてくれて、ありがとうございます！ もう僕は産みの母のことなど何一つ知らなくていい。どんな不幸な過去があろうと、そんなこと、どうでもいい。神様が僕のことを忘れずに愛してくれてる。この神様と一緒に生きていこう。

音楽

(ブリッジ。希望)

ナレーション

ここで、私の両親のことを少し話しておきます。

父は、山梨県塩山市で、4人兄弟の長男として生まれました。家は先祖が寺を^{こんりゅう}建立し奉納したほどの財産家で、長い間檀家総代を務めていたといひます。しかし 16 歳の時に父が突然の事故死をして、一家は離散。彼は単身上京して幾つかの職を転々とし、横浜の病院で代診(担当医師の代理診察者)を務めていた時に、同じ病院勤めの母と出会い、結婚しました。

母のほうは、静岡県富士市の貧しい農家に、3 人きょうだいの末っ子として生まれましたが、幼い時に両親を亡くし、叔母のもとで育てられました。叔母の家も貧しく、小学校すら出られなかったので十分字が読めず、晩年、クリスチャンになった時には、聖書読みたさに、必死に文字を習わなければならなかったのです。やがて縁あって四国の人と結婚したものの、折り合いが悪くて横浜に逃げ、生きるために必死でいろいろな仕事をして働きましたが、人柄の良さを買われてある人の紹介で勤めることになった病院で、父と出会い、2 度目の結婚をしたのです。

音楽

(ブリッジ)

ナレーション

今度こそ幸せになれると思った母でしたが、父がひどい酒乱で、しかも女道楽であることを知ったのは、所帯を持って間もなくのことでした。毎晩酔って帰る父から、母はある夜、信じられないようなことを聞いたのです。

父

(酔って)紀子、紀子！ 今帰ったぞ！

母

お帰りなさい。あらまた、そんなに酔って。

父

うるさい。酒と女が俺の楽しみなんだから、つべこべ言うな。

母

でもこんなに毎晩じゃ、体を壊しますよ。

父

“体を壊す”だ？(高笑い)俺の体はなあ、小さい頃から筋金入りなんだよ。腕つぶしだって、ケンカして負けたことがねえんだからな。

母

それにまたどこかの女の人のところにでもいたんじゃないんですか？ おしろいのおいをふんぶんさせて…。

父

やかましい！ 横浜で身寄りもない一人暮らしのお前をもらってやったのは誰だと思ってる！ 誰のおかげで食わせてもらってるんだ、え？ 紀子、まあ座

れ。いいか、今夜はお前に話がある。

ナレーション

——と言って父が話し出したのは、なんと、父がよその女に産ませた男の子、つまり私を引き取って、育ててくれないかというのです。それを聞いた時の母の気持ちを思うと、今も胸が痛くなります。

けれども、私を自分と同じ不幸な境遇にしたいくないという一心で、引き取って育てる決心をした母には、戸籍上、ひとつの厄介な問題がありました。最初に結婚した男性との離婚手続きをしていなかったため、このままでは重婚になるし、私の入籍も不可能でした。そこで、大阪の兄とも相談した母は、苦し紛れの一策を講じました。数年前に北海道に行ったまま消息不明の母の姉「たま」の戸籍を引き出し、自分の名前の「紀子」の代わりに「たま」を名乗るようにしたのです。「紀子」は失踪宣告を受け、姉のたまも行方不明のままでしたから、母は「たま」として父との入籍を済ませ、私も実子として峯野家の戸籍に載ることになりました。何やらミステリー小説のようですが、母が心の苦しみをこらえて私を引き取り、このような方法で子供にしてくれなければ、今の私はなかったことを思うと、神様のなさることの不思議さに、つくづく感じ入ったことです。

アナウンサー
聖書の言葉

第2章 父の乱行

わが神。昼、私は呼びます。しかし、あなたはお答えになりません。夜も、私は黙っていられません。

けれども、あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます。
(詩篇22篇2節～3節)

ナレーション

父はいわゆる二重人格者の最たるもので、日中は役所勤めの謹厳実直な紳士ですが、夜になると毎晩浴びるほど酒を飲んでオオカミに豹変し、家に帰ると、母に暴力を振るいました。おまけに常に複数の女がいて、酔っては遊び狂い、そのままその人たちの家で酔いつぶれて泊まることもあれば、家に連れてくることもあったのです。

父

(酔って)お～い、帰ったぞー！ たま～！ どこだあ！ どこに隠れてるー！
(独り言)ふん、バカにしやがって。俺様をなんだと思ってやがる。身寄りのないところを嫁に迎えてやったのに、その恩も忘れやがって。亭主の帰りをちゃんと出迎えないとは、なんてえ料簡だ。
(大声で)こらあ、たまあ！ 龍弘！ 出てこい！ いるのは分かってんだ！ お前らをちゃんと食わせてやってるのに、逃げ隠れるとはどういうことだ！ おい！ 出てこい！ また痛い目に遭いてえのかあ！

ナレーション

父の酒乱のため、母の体には生傷が絶えることはありませんでした。酔った勢いで家の中のものをしばしばぶち壊しました。ある時は、高価な黒檀こくたんのテーブルを持ち上げると母に向かって投げつけたのです。

父

この野郎！ 今夜という今夜は勘弁ならねえ！ 俺様が誰だか思い知らせてやるぞ！ このアマあ！

母

きゃー！ お父さん、やめて！ 龍弘、逃げて！ あな…。

効果音 (テーブルを投げつける音。砕ける音)

父 こらあ。逃げるな！ 待て こら！ お前みてえな性根しょうねの悪い女はこうしてやる！

ナレーション 母がなんとか身を避けて無事だと知ると、父は、バラバラになった黒檀の棒で母の脳天を強打したのです。

母 やめて！ やめ…。キャー！ お父さん、お願い、キャー！

龍弘 父ちゃん、やめて、やめて！ 母ちゃんが死んじゃう！

ナレーション 母と私は、父の暴力に備えて、毎晩着のみ着のまままで仮眠していました。夜の8時から12時までが安眠時間でした。12時過ぎに父が帰宅すると、母と私は、用意してあった小荷物を持って、そっと家を抜け出るのはです。まるで空襲の時のようでした。そして親切な近所の人にかくまってもらったり、時には野宿をしたりもしました。そんな中で、父は、時には私にも暴力を振るいました。仮眠していた私に、何を思ったか父は火の入ったままの火鉢を投げつけたのです。直撃は免れましたが、飛び散った灰をまともに顔に浴び、やけどしそうになりました。

音楽 (ブリッジ。暗たん。)

ナレーション それにしても、母の苦労は並大抵ではありませんでした。父が生活費を酒と女につき込んだため、母は小さい私をおぶって、よその家の掃除や洗濯をしたり、衣料品やお茶の行商をしたりして日銭を稼ぎ、私を養ってくれたのです。あまりの苦しさに、母は3度も自殺を試みました。1度目は線路で、2度目は舌をかんで、3度目はネコイラズで…。それでも死ななかったのは、今思えば神様の哀れみでした――。

アナウンサー
聖書の言葉

第3章 少年時代

さらに、主の使いは彼女に言った。「見よ。あなたはみごもっている。男の子を産もうとしている。その子をイシュマエルと名づけなさい。主があなたの苦しみを聞き入れられたから。彼は野生のろばのような人となり、その手は、すべての人に逆らい、すべての人の手も、彼に逆らう。彼はすべての兄弟に敵対して住もう。(創世記 16:11-12)

ナレーション 少年期の私の心の中には、両極端な2つの性格が同居していました。陰性と陽性、今風に言うなら、ネクラとネアカです。陰性の私は、極度に人前を恥じ、ひがんだ心を持って人を避け、孤独を愛し、陰鬱な影のある人間となりました。また父に対する恨みと憎しみの気持ちが日に日に強くなり、まだ小学生なのに、父に対する殺意をさえ抱いていました。それに反して陽性の私は、正義感が強く、世の矛盾や不合理に対しては、激しい抵抗を示しました。また弱い存在である動物、お年寄り、自分より小さな子供に対する優しい心や温かい同情心も、この陽性の故だと思います。この二重性格は、1つの源から流れる2つの川のようなものでした。そして、この矛盾した性格は、いろいろな場面で様々な形を取って現れました。

龍弘(モノログ) ああ、面白そうな映画だなあ。僕も見たいよ。あ、あの子も両親と一緒に入ってくる。あの女の子は両親と弟 2 人と一家 5 人だ。でもうちは貧乏だから、家族で映画なんか見られない。チクショー！

ナレーション 戦後数年もすると、焼け野原だった横浜の町も徐々に復興し始め、急ごしらえの映画館が建つようになりましたが、他に娯楽もない時代で、映画館は連日満員の盛況でした。でも、一度も映画館に入れない私の気持ちは、まず父への憎しみに向けられました。

龍弘(モノログ) 父ちゃんが悪いんだ！ 父ちゃんさえいなかったら、こんな惨めな思いをしないで済んだんだ！ 父ちゃんが憎い！

ナレーション その気持ちは、やがて高じて、親子仲良く映画館に入っていく人たちに向けられ、彼らの楽しみを邪魔してやろうという思いに駆られてしまいました。米軍払い下げのズックのカバンに手頃な石ころをいっぱい詰め込み、映画館の脇にある高い崖の上にはい登り、映画館のトタン屋根めがけて、次から次と石を投げつけたのです。驚いた観客は外に飛び出し、支配人らしい人がどなりながら崖をよじ登ってきました。

効果音 (慣習の驚きと怒りのギャ)

支配人 おい！ その少年！ 何てことするんだ。待ちなさい！ 動くんじゃないぞ！

ナレーション 一目散に駆け出して、なんとか逃げおおせたものの、私は良心の呵責^{かしやく}で、数日もすると、そのままではいられなくなりました。

龍弘(モノログ) とんでもないことをしてしまった。なんの関係もない人たちに迷惑をかけてしまったんだ。謝ろう。行って心から謝るんだ。それでも赦^{ゆる}してくれず、警察に訴えられるならそれでも構わない。謝りに行こう。

ナレーション 映画館に行った私は、最初に出てきた支配人に、涙ながらに自分のしたことを謝りました。支配人はしばらく私を見つめたあとで、静かにこう言いました。

支配人 坊や、よく来てくれたね。もう二度とこんなバカなことをしてはいけないよ。人間は、人に迷惑をかけてはいけない。今回は赦してあげよう。つらい身の上だから映画も見えてないだろう。これからは、映画を見たいときは、おじさんのところにおいで。見せてあげるから。

ナレーション 私は、うれしさに胸がジーンとなりました。殴られたり、警察に連れていかれてもしょうがないのに、赦されただけでなく、こんな特権まで頂いたのです。あの優しい支配人の顔を思い出すたびに、私は新約聖書、ヨハネの福音書 8 章の“姦淫^{かんいん}の女”のことを思い出します。姦淫の現場を押さえられ、イエスのもとに引き出された女は、律法学者たちに石打の刑にされるべきところを、イエスの愛によって救われたのです。主はこう言われました。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはいけません。」あの時の私は、まさしくこの姦淫の女と同じでした。小学校 5 年ごろの出来事です。

アナウンサー 第 4 章 内省時代

ナレーション この投石事件を境に、私は強い内省期を迎えました。中学に入るとその傾向

は更に強くなり、孤独を愛し、特定の友人以外とはほとんど付き合いなくなりました。その代わり、私は“美しい世界”を無性に憧れたのです。

第 1 に、大自然に対する憧れです。とりわけ海を愛した私は、海洋小年団に入りました。

第 2 は、芸術や音楽の世界への憧れでした。それは、我を忘れる“陶醉”の世界でした。

第 3 は、自然科学や哲学の世界です。一見違う世界のようにですが、共に永遠不変の宇宙の真理を求めるところが、私の心を強く引き付けました。

でも、そんな中で、私の心には、ある疑問がわき起こりました。

龍弘(モノローグ) こんなんでいいのかな。結局これは、厳しい現実の境遇から逃避しているんじゃないのか？ 一時的には夢中になれても、そこには変わらない喜びや安らぎはない。何か、僕の心をしっかりとつかんでくれる、“意志を持った言葉”が欲しい。それも、周りの状況で変わってしまうような人の言葉じゃなくて、絶対的な真理が…。それは、…「聖書」の言葉しかないんじゃないか？ ああ、聖書が読みたい。この目で読んでみたい！

ナレーション 高校 2 年になっていた私は、矢も盾もたまず近所の古本屋に行って、恥ずかしさを隠すように周りを見回しながら、生まれて初めて英和对訳のポケット聖書を買いました。なぜ恥ずかしいと思ったのでしょうか。たぶん、心のどこかに、“宗教は弱者や老い先短い老人のもの”という謝った先入観があったせいだと思います。

私は、その日から、むさぼるように聖書を読みました。

龍弘 (聖書を読む) 「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」
「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」

ナレーション それは、それまでに読んだ、どの哲学書とも違うものでした。聖書は、私の心に新鮮な命の風を吹き入れてくれました。私は更に進んで、さまざまなキリスト教の本を読み始めました。中でも、内村鑑三や賀川豊彦、ヒルティエーのものなどは、全集を買って片っ端から読みました。しかし、このように“知識”としてキリスト教への理解を深めても、私の現実の生活は、さほど変わりませんでした。それどころか、現実と理想の板挟みになった心のジレンマは、かえって深まっていったのです。

アナウンサー ナレーション 第 5 章 入信

父の行動は一向に改まらず、父に対する私の激しい憎しみや殺意も、依然として心の奥深くに潜んでいました。一方では、このような状態から抜け出して、もっと理想的な人間になりたいという思いが頭をもたげ、私の間では、いつもこの“二人の自分”が闘っていました。かなり前から読んでいた聖書の言葉も、なんの助けにもなりません。それを、単なる宗教書として読み、人の心を根底からつくり変える神からのメッセージとして受け止めていなかったからで

す。しかしそんな私にも、“魂の夜明け”の 때가近づいていました。まさしく「人間のピンチは神のチャンス」だったのです。

Mさん ああ、峯野さん。ちょうどよかった。今度お会いしたらお誘いしようと思ってたの。私は教会に行ってるんですけど、よろしかったらぜひ一度いらっしやいませんか？ きっとお役に立てると思いますよ。

ナレーション それは、近所に住む M さんという女性でした。私はそれまで、高校時代の終わりからもう 4 年間も聖書を読んでいたのに、まだ教会に行ったことがありませんでした。彼女が通っていた蒲田シオン教会は、JR 蒲田駅の近くにありました。初めてその教会に出席した日のことは、今でも忘れられません。

Mさん さあ、峯野さん、ここよ。今日はね、あなたのような“教会は初めて”という人のための、特別の集会なの。さ、入りましょう。

教会員(女性) いらっしやい！ ようこそおいでくださいました。さあ、お入りください。

教会員(男性) あ、M さん。この方ですね、峯野さんって。いらっしやい、峯野さん。お待ちしてましたよ。間もなく始まりますから。

ナレーション 初めての私を、笑顔で優しく、親切にもてなしてくれる教会の人たちの顔は輝き、喜びに満ちていました。争いに満ちた我が家の暗さとは、まさしく天地の違いでした。

牧師 さあ、では皆さん。ご一緒に賛美しましょうか。“賛美”というのは、目には見えませんが、今ここにおられる神様を褒めたたえることなんです。初めての方も、何度も歌いますから、ぜひ覚えて帰ってくださいね。

(賛美)ハレル、ハレル、ハレル、ハレルヤ 主を褒めよ！

ハレル、ハレル、ハレル、ハレルヤ 主を褒めよ！

主を褒めよ、ハレルヤ 主を褒めよ、ハレルヤ…。

牧師 皆さんの中で、今、心の中に寂しさを感じている人はいますか？ お友達は結構いるんだけど、本当に心を開いて何でも話せる人がいなくて、悩んでいる人はいますか？ あるいは人間関係がうまくいかなくて、苦しんでいる人はいませんか？ 実はかつて私もそうだったんです。…

ナレーション 生まれて初めて聞く、キリスト教の説教でした。神の愛と、人の罪と、人生の重荷についてのメッセージで、キリストの十字架の救いが強調されました。最後に、説教者はこう言いました。

牧師 皆さんの中に、今晚の話を聞いて、キリストを心から信じ、救われたいと思う人はいませんか？ そのような人がいたら、勇気を出して前に進み出てください。お祈りいたしましょう。

ナレーション 私は、何か聖なる力に押し出されるような感じがして、前に進み出ました。自分でも不思議に思うほど素直になり、十字架による主イエス・キリストの救いを完全に信じ、一切の重荷をキリストの十字架のもとに投げ出すことができたのです。その時、説教者は私の頭に手を置き、こう祈ってくれました。

牧師 神様、この兄弟をお救いください、心から感謝します。この兄弟は、今日からあなたのみ手の中にあります。この兄弟を祝したまえ。

ナレーション 初めて“兄弟”と呼ばれ、もう独りではないんだと思うと、うれし涙がこみ上げてきました。

牧師 兄弟、あなたは、今晚から主イエスのものです。全てが新しくなり、これから兄弟の人生は、180度転換しますよ。心の重荷は全て取り除かれ、“電信柱に花が咲き、焼いた魚が泳ぎ出す”ような、新しい人生が始まります。さあ、安心していきなさい。

ナレーション こうして私の人生は、ついに朝を迎えました。自分が変わると、周囲までが変わって見えます。あんなに暗く殺伐としていた蒲田駅前の雑踏と駅舎が、何か全く別の場所のように思えました。

聖書の言葉 すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。(マタ 11:28)
主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。(使徒 16:31)

ナレーション その晩、集会で語られたこの2つのみ言葉が、私が最初に主から頂いた救いへの道しるべとなりました。私が大学2年の春、1959年(昭和34年)のことでした。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション こうして喜びと希望に満ちた教会生活が始まりました。大きな心の変化の中でも、とりわけ父に対する思いが変わりました。父は、ある女性に勧められて、当時急速に勢力を拡大していた新興宗教に入信していました。私も一度は、父と行動を共にして、この宗教の中に真理があるのではないかと模索したのですが、やがて失望して離れたので、この団体の地域リーダーになっていた父は激怒し、私たちの溝は、以前にも増して深まっていたのです。そんな父への激しい憎しみの情が日に日に失われ、父の魂の救いを願うとりなしの祈りが湧き起こってきました。

そんな心の変化を、誰よりも喜んでくれたのは母でした。私は、喜び勇んで受洗＝洗礼を受けるための準備会に出ました。

龍弘 受洗の志願ができて、とてもうれしく思っています。これからは、ますます励んで、先輩の皆さんのお導きを頂きながら、よいクリスチャンになっていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

ナレーション ところが、このような“公約”をした直後の日曜日に、さほど大した用事もなかったのに、私は礼拝を休んでしまったのです。神様を求め始めてから、一度も休まず守ってきた聖日厳守を破ってしまった、という罪の意識が、私をさいなみました。

龍弘(モノローグ) (エコー) 教会の人々を欺いてしまった。もう教会に行くことはできない…。自分は、あの主を裏切った罪の呵責^{かしやく}で、首をくくって死んだというユダのような人間ではないのか？ ああ、いったいどうしたらいいんだ?!

ナレーション 私は、とうとう蒲田シオン教会にも行けなくなってしまいました。しかし、このサタンの罠^{わな}と思われる信仰の危機こそ、主が私の信仰を養い、更に高い状態へ

と引き上げてくださるための、格好のプロセスとなったのです。

その年のある秋の夕暮れのことでした。ふと久しぶりに街を歩いて見たくなった私は、静かな山手地区と呼ばれている丘に登りました。そこにともる家々の灯りに混じって、一本の十字架がくっきりと照らし出されているのが見えました。それは、丘の中腹に建てられた、ある教会の納骨堂でした。この納骨堂こそ、私の母教会となった、横浜の清水ヶ丘教会のもので、そこから少し下ったところに教会がありました。

龍弘(モノローグ) 「秋の特別伝道集会。どなたでもご自由にお入りください」…。どうしよう。蒲田教会にはどうしても行けなかった。でもここなら、知ってる人は誰もいない。ああ、もう一度教会で神様の話が聞きたい！

ナレーション 私は、何かに導かれるように、他の人たちに混じって、その教会の中に入っていきました。

特伝講師 …今日お集まりの皆さんの中に、今、罪の呵責で苦しんでいる方はいませんか？ このペテロのように、自分はどんなことがあっても主に従っていくと思いながら、自分の弱さに負けて、もうダメだと絶望している方はいませんか？ 大丈夫です。イエス様の愛は、私たちの罪や弱さで変わってしまうような小さなものではありません。無条件の、アガペーの愛なのです。今のあなたのままで、そのまんまで、主のもとにお帰りになりませんか？

(音楽) (招きの音楽)

ナレーション この招きこそ、旅人が砂漠で待望の雨を迎え、また泉を掘り当てた瞬間のようなものでした。私は直ちに応答し、恵みの座に進み出ました。日頃、人前では喜怒哀楽を表すことはめったになかったのに、喜びの涙が止めどもなくあふれてきました。私の信仰生涯における最初の霊的危機は克服され、サタンは去りました。私はこの貴重な経験を、我が生涯における“愛のクサビ打ち”と呼んで、いつまでも貴び、感謝しています。これらは全て、神の深いみ心から出た、節理のみ業でした。私がバプテスマ=洗礼を受けて、更に信仰の高みへと引き上げられる時が、神様によって備えられていたのです――。

<前編 終わり>